

福澤諭吉の「殉教・殉死」論



会長 渡辺利夫

福澤諭吉「学問のすすめ」の核心は第7編だと私はみる。

第7編が書かれたのは、明治7年3月である。ここで福澤は「殉教」「殉死」を人間道德の最高のものとして説いた。暴政、つまり政府の暴力に人民はいかに抵抗すべきかと問うて福澤は三策、「節を屈して政府に従う」「力を以て政府に敵対する」「正理を守て身を棄る」を示し、取るべきは第三策だと福澤はいうのである。殉教、殉死のすすめである。殉教とは信念のために命を棄てること、殉死とは臣下が主君の死を悼み命を絶つことである。天賦人權説や社会契約説により日本社会に新しい規範を示そうという福澤が、新規範について語る同一の著作の中で、旧時代そのままの精神の構えを最上策として提示しているではないか。

江藤新平が佐賀に帰る前に、既に鹿児島に下野していた西郷隆盛は、江藤から加勢を求められたものの、これを拒み、殉教、殉死をもって政府に抗せよと説いたのである。さらに福澤は西郷隆盛を深く敬愛していた。廃藩置県という大業が西郷なくしては成し遂げられず、これなくして維新は不可能であったことを福澤はよく知っていた。開明なる西郷が、不平士族を糾合して、みずからそれを打ち立てた新政府に武力をもって対抗し自滅するような無謀を企てる人物ではない、正理を諄々と

説き、正理に殉じた人物が西郷だというのが福澤の見立てであった。

西郷は西南戦争により政府に武力をもって刃向かった人物ではないか。そう考える人もいるかもしれないが、福澤の見立てはそうではない。西南戦争は鹿児島私学校に蝟集する士族が、西郷の意に反して起こした暴走である。暴走発生の報を伝え聞いた西郷は「天だ、天でござす」といって、その後は死に場所を求めて九州山中をさまよい歩いただけであった。

福澤は「学問のすすめ」第14編を書き上げた年の翌明治10年9月に「丁丑公論」を執筆した。抵抗の精神の重要性を西郷隆盛の生きざまの中に描き切った名説が丁丑公論である。そこで福澤は次のように述べた。

「近来日本の景況を察するに、文明の虚説に欺かれて抵抗の精神は次第に衰頹するが如し。苟も憂国の士は之を救うの術を求めざるべからず」

幕末・維新の喧騒と動乱の時期を経て、近代主権国家への道をひた走っていたあの時代にあつてなお、福澤は抵抗の精神、殉教、殉死という精神の苛烈を説きつづけたのである。

衆議院選挙も与党・自民党のこれ以上もない大勝に終わった。精神の苛烈さという点からみれば、「風景」はいかにも安穩ではないか。